

著者の中川氏と評者とは、ともに一九七〇年代の後半生まれで同世代である。思い起こせば、この世代が学部生時代を過ごした世紀転換期当時は、新しい歴史教科書問題に象徴される歴史修正主義の聲が喧しかった一方、この動きに対抗して「ナショナル・ヒストリーを超える」「国境を超える」といった標語を掲げ、一国史観の超克を実現するための方法如何をめぐる議論も盛んだった。あれからおよそ二〇年。政治的ありきの歴史研究からは距離を置きたいと願いつつ、日本におけるナショナリズムとグローバリズムの来し方を冷静に見定めようと努めてきた、そういう研究者としての試行錯誤の道程は、あるいは著者と評者に共通のものなのかもしれない。今後の氏によつて研究がますます深められ、本書の続編となる論考が次々生み出されることを願う。

（東義大学校助教授）

水谷悟著

『雑誌『第三帝国』の思想運動』 ——茅原華山と大正地方青年』

（ベリかん社・二〇一五年）

神谷 昌史

近年の近代日本思想史研究において、雑誌メディアと関連したものは盛況を極めている印象がある。たとえばここ二、三年ほどで出版された成果として思いつくものを挙げてみても、佐藤卓己氏の編著を含めた著作（『図書』のメディア史——「教養主義」の広報戦略』岩波書店、二〇一五年、同他編『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』創元社、二〇一四年、同編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』岩波書店、二〇一五年）、雑誌を中心とした出版ジャーナリズムを対象とした大澤聡『批評メディア論——戦前期日本の論壇と文壇』（岩波書店、二〇一五年）、本誌第四五号に宇野田尚哉氏の書評が掲載された根津朝彦『戦後『中央公論』と『風流夢譚』事件——「論壇」・編集者の思想史』（日本経済評論社、二〇一三年）などをはじめ、数え上げるときりがない。

メディア史研究の進展が思想史研究にも波及しているからな

のか、それとも相互に関連して進んできているのかはさだかではないが、雑誌メディアを対象とする思想史研究が大きな流れとなっていることは疑いようがなく、日本思想史学会二〇一六年度大会シンポジウムのテーマが「思想史のなかの〈雑誌〉メディア」であるのもこうした潮流と深く関係していると思われる。

さて、ここで取り上げる本書は、大正二年（一九一三年）に茅原華山たちによって創刊された雑誌『第三帝国』を対象に、日露戦後の国内外の状況を踏まえつつ、雑誌の作り手側とそれを受け取る読者の「思想的連関の実像」を捉えようとするものである。

二

本書は次のような構成となっている。

序章 本研究の視点

第一章 「益進主義」の思想形成——茅原華山に即して

第二章 「第三帝国」の創設

第三章 「第三帝国」の理論と実践

第四章 「第三帝国」の思想圏

終章 大正地方青年と雑誌『第三帝国』

序章は一枚の写真から始まる。雑誌『第三帝国』を刊行していた益進会の東北講演旅行の際のものである。この写真から、

益進会の目が地方に向けられていたこととともに、地方支部が単なる受け手ではなく講演会を主催し様々な運動を実践する存在であり、発信者と受信者との相互連関があったことが指摘される。著者の水谷氏は、先行研究を紹介しつつ、「雑誌媒体を基軸とした思想運動には、従来の方法ではすくい上げられないより広範な国民の「国家」への思いを捉える可能性が伏在している」（一四頁）と述べている。「従来の方法」、つまり「内在的な論理構造を分析していくような方法」（一七頁）では頂点思想家のみしか扱えず、また「民衆思想史」は「方法的自覚には乏しい」（同）とされる。そこで著者が採った方法は「雑誌メディアを介在した思想運動、そこにおける記者と読者の関係を「明らかにする」というものである。このようにして著者は『第三帝国』・益進会とその読者という「集団の思想史」「運動の思想史」に着手する。

第一章では『第三帝国』の「求心力」とされる茅原華山の中心的な思想である「益進主義」の形成について考究される。まず、茅原の思想形成の画期として明治三四年～三六年の『長野新聞』主筆時代が取り上げられる。文明の進歩に対する貢献を常に意識していた茅原は、個人の生活の充実が、共同体、さらには「天下国家」の発展につながると考えており、地方の青年層に社会を牽引する存在として期待を寄せていた。日露戦後の青年たちは国家・社会とのつながりが希薄になっていたが、教育と実業の調和、実業教育の拡充により、地方青年を社会の担

い手として育成することを茅原は主張した。

また、時は帝國主義論全盛の時代であったが、茅原は商工業の拡充によつて國際的な生存競争の中で生き残ることを考えていた。明治三十八年からの五年間の洋行で、茅原は「西洋文明を相対化する視座を確立し、文明への認識を深めていく」（四九頁）。西洋社会が生活問題に直面していることに遭遇し、東西文明のそれぞれの問題を相互補充により乗り越えることを構想した茅原は、「生活」という視点から文明の捉え直しを図つていき、これがのちの「益進主義」の原型となる。

「益進主義」とは元々W・ジェイムズのメリオリズム (Meliorism) の訳語であり、茅原は現状を批判しつつ苦闘して計画を新たにしていくなかで思考態度のことであるとした。ベルグソンやオイケンの影響も受けながら、茅原の「益進主義」は形成されていった。「益進主義」は日露戦後の青年層の国家との乖離を修復し、自立した個人として実生活から政治へと自我を拡充することを提唱するものであった。

第二章は雑誌『第三帝國』の創刊が取り扱われる。まず地方の青年たちが益進会の同人となるまでの過程が検討される。石田友治、松本悟朗、野村善兵衛（隈畔）、鈴木正吾らは様々な教育を通して、茅原のもとに結集して大正二年（一九一三年）一〇月『第三帝國』を創刊するに至った。創刊の趣旨として「生の飛躍を試み、国家の旧組織を打破して、更に新なる第三帝國を創造せんと欲するものなり」「吾人は国家それ自らを始

め国家の各機関を生活化せざんば止まざらんと欲す」と創刊号の巻頭で述べられている（一九九頁より再引）。第二節では同人の経歴や益進会の構成も詳細に紹介されている。

続く第三節では「地方青年読者たちの「益進」——「投書」「交歓」「通信」として、同誌に設けられた投書欄に寄せられた読者の投書を検討し、『第三帝國』が地方青年に支持された理由を説明しようとしている。同誌の投書欄には、地方青年から、学校教育や軍隊生活、地方社会の改善、官僚政治批判や選挙権拡張など様々な意見が寄せられていた。そうした投書の検討により、筆者は読者が同誌に求めていたのは「自我と社会との調和」であるとし、「益進主義」の思想があらわれていると分析している。また投書欄での読者間の交流が着目されて交歓欄が新設され、「同人より読者へ」「読者より同人へ」と両者の意見交換の場とされた。このような投書欄や交歓・通信欄が設けられることにより、同誌は作り手からの一方通行ではなく、同人と読者とのインタラクティブな交流の場になっていたとする。著者は、読者からの意見・要望に同誌が応答することから、実践運動が展開されたと指摘している。

第三章「『第三帝國』の理論と実践」は、誌上での論争や普通選挙運動を検討するのとともに、読者の実態を説明しようとしている。茅原の唱えた新憲政擁護運動は、政治的に覚醒し始めた地方青年たちの不満などを吸収しながら、これまでのメディアが作り出せなかった読者とのつながりを創出し、一方通行

ではない政治運動の実現を図るものであったとされる。またこうした政治運動と同時に、『第三帝国』誌面では多くの論争が戦われていた。彼らの思想はこうした運動と論争によって具現化されていたと著者は論じている。

また益進会の秋田県内の三つの支部を事例とし、『第三帝国』の支持基盤が分析される。どのような構成員から成り立っており、どのような活動を行っていたのかを追うことで、読者の実態を明らかにしようとしている。その結果、上からの地域再編ではなく、地域の自立化・活性化を志向する青年層が『第三帝国』の支持基盤であったことが解明される。しかも政治的な面だけでは捉えられない「情念」をも同誌の言論と実践により導き出されたと読み解かれている。

第三節では普通選挙請願運動から「模範選挙」運動への実践が検討される。特に大正四年（一九一五年）の第一二回総選挙において立候補した茅原が一切の選挙活動を行わない「模範選挙」を試行した真意は、金権政治と形式的政党政治への批判であり、あるべき選挙像を国民に示すことであったとされる。

一連の「模範選挙」「模範落選」により茅原と石田の間に亀裂が生じ、益進会は分裂する。最後の第四章では、これまでの研究では茅原の「変節」が原因とされていたのに対し、選挙運動への見解の相違や、『第三帝国』をめぐる財政上の内紛が要因であることを明らかにしている。しかし、こうした分裂騒ぎが報道されたことにより、支持基盤を喪失する事態となった。

益進会の分裂は失望と喪失を生むことになったが、『第三帝国』が目指したものは継承されたとするのが第二節・第三節である。ここでは野村隈畔、金子洋文、室伏高信が取り上げられる。野村隈畔は茅原が「益進主義」において自立した個人を追い求めたことを受け継ぎ、自我論の展開と「絶対自由」の希求によりラディカルな「社会批判」「国家批判」を示したとされる。

金子洋文は『第三帝国』の熱心な読者であった。金子は茅原および武者小路実篤から多大な影響を受け、両者の「相剋」に悩みつつ、やがて真摯に働く生産者たる「若き農夫」を発見し、『種時く人』を創刊するに至る。「若き農夫」は茅原と武者小路の間で葛藤していた金子が両者の「調和を期した「人間生活」を担う存在であった」という。著者は「若き農夫」こそ、茅原が示していた「普遍共通の心（ユニヴァーサル、マインド）」に連なる人間像であるとしている。

室伏高信は茅原華山に影響を受けて思想形成を行った文明批評家である。室伏は民本主義論争に参入したことで注目されるようになったが、彼のデモクラシー論は茅原の議論を継承していると著者は見ており、室伏の説く「生命デモクラシー」は茅原の「益進主義」の社会観を「継承・発展させた政治論」であるとしている。

終章では、益進会分裂がはっきりしたときに第一期『第三帝国』は使命を終えたが、「思想集団」としての活動が与えた影

響は大きいとされる。その上で、改めて本書で設定された課題がどのように解明されたのかが確認され、今後の課題が提示されて幕が閉じられる。

三

本書について雑駁に概観してきたが、次いで評者の感想と気になった点をいくつか記しておきたい。

評者にとって、茅原華山という思想家は、興味深くはあるが読んでみると少々つかみどころがなく、茫漠とした議論を展開する大風呂敷を広げるタイプの文明批評家というイメージがあった。それが著者の研究によってひっくり返され、鮮明な像を与えられたと感じた。最初期からの茅原華山の思想展開が丁寧に追われており、ようやく茅原の姿がはっきりしてきたように思う。また、『第三帝国』といえば茅原華山ばかりがクロージアアップされがちのところ、石田友治ら益進会同人にもスポットライトを当て、その実像を明確にしたことは非常に意義のあるものである。

さらに本書の白眉は、地方青年読者の実態が解明されている点であろう。『第三帝国』の誌面を丁寧に読み解き、投書欄・交歓欄・通信欄を詳細に分析したところは大変興味深かった。読者である青年層の葛藤や煩悶が生々しく浮かび上がってくるようであった。さらに『第三帝国』の支持基盤の実態を明らかにすべく秋田県内の支部について現地の資料や聞き取り調査な

どをもとにして分析した部分は、事例は秋田県一県に限定されてはいるが、強い説得力を持っている。

気になった点は次のようなものである。

本書は読んでいてわかりやすい書物である。その理由のひとつに、序章において、また各章・各節において課題が明示され、それを解き明かす方法も提示されることが挙げられる。また重要な点は何度も確認される。こうしたことは読者に対して大変親切であるのだが、反面で繰り返しが多い印象も与える。読みやすさ・わかりやすさと、無駄のない叙述はバランスが取りにくいと思うが、もう少し刈り込んでもよかったように感じた。気になった二つ目の点は、対象に密着し過ぎではないかという点である。取り上げられている茅原華山にしても、野村隈畔や室伏高信にしても、非常に素晴らしい比類なき「頂点思想家」のように見え、まるで「善玉」のように描かれている印象がある。これはいかがなものだろうか。

たとえば野村隈畔の描かれ方である。著者は野村の思想について「近代的自我に対する根源的な批判を内包する彼の思想」（二七四頁）、「近代合理主義への根源的な批判と〔中略〕資本主義社会の理不尽さに対する徹底抗戦」（二八五頁）、「内的世界への沈潜により政治・社会的価値を根源的に批判したという点において、もっとも原理的かつ急進的な国家批判を示していた」（二八九頁）と評している。著者は野村の著作を丁寧に読み込んだ上で、野村の論理に内在的な理解を示しているようにで

ある。たしかに野村の述べていることをまとめると著者のいう通りであるように思う。しかし評価や位置づけという点であまりに野村の論理に密着し過ぎ、寄り添い過ぎていてのではないか。

かつて飯田泰三氏は未刊の博士論文において大正期文明批評家の基本動向のひとつとして、自我と共同体の「ロマン的合一化」志向を指摘し、その典型例として野村隼輔を取り上げた。飯田氏によれば、自我と外界との乖離・疎隔が強く意識されると、その状態に耐え切れず、今ここにない状態を憧憬し、そこに合一化を求めていくという。そしてそうしたロマン主義的合一化志向において、「自我」や「主体」という觀念自体に意味の転換がなされ、疎隔の感覚のない外界とのつながりを指す言葉になるという。野村隼輔の「自由」は飯田氏の指摘する通りのものであるように評者には思われる。そもそも自由とは絶対的で無制限のものではなく、むしろ制約や枠組みが存在するかからこそ意味を持つもののはずである。ところが野村は制約や限定のない自由を欲する。それは実現不可能な、「今ここ」ではないどこか・何かに融合したいという欲望なのであって、果たして「近代合理主義への根源的な批判」のようなものなのだろうか。

四

最後には気になる点というか、批判めいたことを記したが、

本書が高度な達成であることには変わりがない。著者は本書の課題を以下の三つとしている。一つ目は茅原および『第三帝国』を刊行していた益進会が唱えていた「益進主義」を「思考様式のレベルで定位すること」（一四頁）、二つ目は益進会の思想集団としての存在形態および『第三帝国』の実態を明らかにすること、三つ目は言論の内容と実践の関係を時代状況の中で押さえたうえで益進会同人と地方青年・読者との関連を解明すること、である。この三つの課題は見事に達成されており、単なるメディア史の領域を取り込んだ思想の検討ではない、「集団の思想史」「運動の思想史」として優れた成果であるといえる。

（滋賀文教短期大学教授）